地域密着型インターンシップ最終報告

2011 年 4 月 30 日

6 期生　たけ

【研修の目的と課題】

6 月から秋田のホテルで働くことになっており、素材広場が取り組んでいる「宿の地産地消」について学び、実践していきたいと考え、本インターンシップへの参加を希望した。しかしながら、3 月 11 日に東日本大震災が発生し、研修内容は被災者の支援や地域の復興・再生に向けた取り組みへと変更になった。

震災後、メディアからは被災地に関するさまざまな情報が流される一方で、福島については原子力発電所が情報の中心となっている。福島は今後、地震、津波からの復興に加え、原発問題や風評被害とも闘い、地域復興、観光復興をしていかなければならない。

本インターンップを通じて、会津、そして福島の現状や復興・再生に向けた取り組みを見、聞き、学びながら、今後、東京や秋田でその取り組みにどのように関わっていけるのか、考えていきたい。また、災害に強い地域や社会をつくっていくうえで、重要となるものはなにか、見つけ出したい。

【研修内容】

研修内容としては、

（1）被災地視察・物資提供：被災地の現状確認と支援物資の提供

（2）元気玉プロジェクト：被災者の支援と会津地域/福島の長期的な復興

（3）福島農産物応援キャンペーン：県内の生産者支援と県産農産物 PR

の 3 つを中心に行った。

1. 被災地視察・物資提供

南相馬市、二本松市、いわき市を訪れ、災害対策本部やお宿さんに、お米を中心とした物資の提供を行うとともに、被災地を視察した。

1. 1. 南相馬市

南相馬市は、東日本大震災により沿岸地区の約 1,800 世帯の家屋が破壊されるなどの甚大な被害を受けた。また、福島第一原子力発電所から 20 キロ以内の避難指示地域、20～30 キロの屋内退避区域にかかる南相馬市では、多くの市民が県内外各地（8 県 86 自治体）への避難を余儀なくされるとともに、約 2 万人が屋内退避生活を続けている。その一方で、震災発生から約 1 ヶ月が経とうとしているにもかかわらず、屋内退避生活を送る人びとには必要な物資が届いていない現状にあった（南相馬市 HP より）。

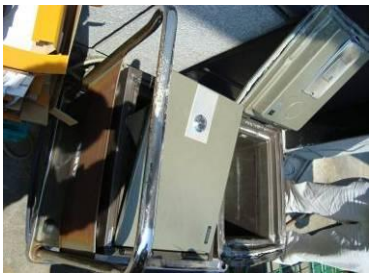
そこで元気玉プロジェクトのお米 100 キロと缶詰を車に積み、南相馬市に向かった。南相馬では、「みそ漬け処　香の蔵」を訪れたのち、津波の被害を受けた地域を視察し、市役所を通じて物資を提供してきた。

1．1．1．みそ漬け処　香の蔵

最近まで新潟の長岡に避難していたという店長の岩井さん。建物自体には大きな損傷はないようだったが、ところどころ瓦が落ちており、店内もまだ片づけが済んでいない様子だった。原発から 30 キロ以内の地域は、特に停電時には外から来たと思われる窃盗集団で無法状態となっていたという。香の蔵もまた金庫をこじあけられ、火事場泥棒の被害にあったというが、「風評被害は怖いが、黙っていても潰れるだけだから」といって、次週からの営業再開を目指す姿が、とても印象的だった。なお、4 月 4 日より営業再開した香の蔵の商品は、4 月 16～17 日の安曇野市での福島応援フェアでも販売し、完売した。

▲地震により瓦が落下している

▲岩井店長にお話をうかがう



▲こじあげられた金庫

1．1．2．津波の被害地域

香の蔵から海側に車を進めると、奥に見える海に至るまでの建物がほぼ倒壊し、がれきが散乱した平地が現れた。津波の被害地域である。災害派遣の自衛隊が作業するなかに、住民と思われる人ががれきを片付ける姿も散見される。海沿いまで進むと、堤防は一部決壊し、家や電柱などの構造物は軒並み流され、家の基礎部分しか残っていない。ところどころ、畳や雑誌なども散乱しており、かろうじて人の生活の痕跡が感じられた。水田にはがれきや倒木、船、車などとともに海水が残っていた。あまりの光景に、言葉を失った。

▲海まで家屋が存在しない

▲水田には海水と船が

▲流されてきた軽トラック

1．1．3．市役所・物資搬入

市役所の入り口には、人の出入りなどの避難所情報、新聞の切り抜き、あきる野市からのメッセージなどが掲示されていた。市職員やその家族で亡くなった人も少なくないなか、職務にあたる市職員の顔には疲労の色が隠せない。報道では 7 メートルの津波とされたが、実際は 10 メートルを超しており、「電柱が水平に押し流された」という。また、最近は 20 キロ圏内にも荷物を取りに行ったり、ウシやウマなどに餌をあげに行ったりしている人もいるという。

物資に関しては、物流が回復してきたこともあり、比較的届くようになってきたが、商店がほとんどやっておらず、住民は支援物資に頼らざるをえないため、米を含め保存の効く食料品は欲しいとのことだったので、持ってきた支援物資をストックヤードの体育館に

物資を搬入する。そこには、思っていた以上に物資があり、特に衣料品の量が多かった。ここから、いかに屋内退避している人びとに届けるかが問題と考えられる。

▲市役所にあった新聞の切り抜き

▲物資倉庫の様子

▲衣料品が多く残っている

1．2．二本松市

1．2．1．岳温泉

二本松市には､浪江町が役場機能ごと移ってきている｡二本松市を訪れた 4 月 12 日には、避難所から宿への二次避難が進んでおり、避難者を受け入れている「光雲閣」と「扇や」にお米を届ける。光雲閣は、壁がはがれたり、駐車場の一部が崩れたりと、地震の被害も少なからずあるようだったが、復旧作業を進めつつ、避難者を受け入れていた。

1．2．2．二本松農園

20 年間、首都圏・大阪圏向けに、二本松ブランドきゅうりの生産・販売を行ってきた二本松農園。震災後には、福島の売れなくなってしまった農産物をネット販売・数百の注文を受け、農家の救世主となった。もともと観光関係におり、現在は農家をされている代表の齊藤さんと横田さんの会話は、宿と農家双方の立場や意見を汲んだもので、その場にいるだけで学びの多いものだった。

1．3．いわき市

いわき市は、4 月 19 日時点で 296 名の死者、7,129 棟の住宅被害が確認されている。3 月 11 日のみならず、4 月 11 日、12 日にも震度 6 弱の揺れが観測された。

1．3．1．いわき湯本温泉

4 月 12 日、いわき湯本の宿「古滝屋」と「こいと」に支援物資のお米を届けに行った。古滝屋は、全エレベーターが故障し、増築した棟との接続部分の天井が崩落するなど、地震の被害は大きく、営業再開まで時間が掛かるとのことだった。訪れた際も、余震の影響で断水や停電が起きていた。古滝屋で話をうかがっている時にも、震度 6 弱の地震が発生した。直下型で、「ドーン！」という音とともに大きな縦揺れと衝撃があった。

大きな余震が続くなか、営業再開に向けて建物の補修工事と安全確認を行う宿の方々の心労は計り知れない。そんななか、余震をモノともせず宿の方々に会いに行く横田さんは、お米とともに、「元気玉」も届けていたように感じられた。

1．3．2．四倉

四倉の穏やかにみえる海岸線の横には、津波の被害地域が広がっている。その被害状況は、南相馬のそれと異なり、倒壊した家のすぐ横に、無事（にみえる）家があるなど、同じ集落でも家屋によって被害が違っていた。船も打ち上げられてはいるものの、漁港付近

に留まっていた。とはいえ、四倉漁港の被害は壊滅的で、余震も続いていることもあり、復旧・復興にはまだまだ時間がかかるだろう。

▲穏やかな海の奥には第二原発

▲倒壊した家と無事にみえる家

▲四倉漁港の様子

2. 元気玉プロジェクト

2. 1. 元気玉プロジェクト 1.0

東日本大震災では、福島県も大きな打撃を受けた。そんな中、県内でも比較的被害の少ない会津若松から県内の被災者や避難者の「食」を支えようと、会津のソーシャルビジネス 4 事業所と福島県会津地方災害対策本部、会津短大食物栄養学科が連携し、3 月 17 日から 4 月 6 日までおにぎりの炊き出しを行ってきた。ボランティア総数 685 人の協力のもと、おにぎりを計 25,135 個握り、「今、足りないところ」に届けてきた。

このプロジェクトの目的は、おにぎりを「足りていない避難所に届ける」ことだが、その活動を通じて新たなつながりが生まれるなど、「きっかけ」としての場にもなっており、そういった意味でも意義深いプロジェクトであったと感じた。

▲4 升釜で炊きあがったごはん

▲握り方を教わる男子学生

▲災害対策本部にお届け

2. 2. 元気玉プロジェクト 2.0

元気玉プロジェクトのセカンドステージとして、避難所アセスメント（会津つなプロ！）を中心機能とした「あいづ長期復興連携会議」が 4 月 11 日に発足した。そのためのミーティングや避難所の視察/アセスメントに参加し、議事録や報告書の作成、データの打ち込みを行った。

そのなかで痛感したのは、避難所や避難者の状況が日々変化することと、それに対して有効な支援を行うには即応体制が不可欠であること。4 月 9 日・10 日のアセスメントの際には、避難所に残っている避難者の数が日に日に減少するなか、避難者は「取り残された感」を募らせており、「いつまで避難所にいれるのか」「次はどこに移動するのか」「いつ家に戻れるのか」といった疑問への答えを求めていた。二次避難が進み、避難所の避難者数はさらに減っていくことが予想される中、先を見越した支援が必要である。

▲川西公民館(会津坂下町)　▲あいづ総合体育館(会津若松市)　▲高田体育館(会津美里町)

3. 福島農産物応援キャンペーン

今回の大震災では、地震、津波の被害に加え、原発事故に伴う風評を含めた被害により、福島県内の農林水産業は甚大な被害を受けている。そのような中、長野県産直・直売連絡協議会、安曇野市直売所連絡協議会、まちむら交流きこうの協力のもと、16 日・17 日に安曇野市内の直売所で福島農産物応援キャンペーンが開催された。

シイタケやネギ、トマトなどの野菜、香の蔵の漬物や会津中央乳業のヨーグルトなどを販売、二日間の総売上は目標の 100 万円を超え、大盛況であった。安曇野の方々からは、たくさんの温かいお言葉を頂き、風評被害に負けない、顔の見える「地域と地域のつながり」の重要性を痛感した。

▲ほりがね物産センター特設売場　▲会津中央乳業と香の蔵の商品　▲初日終了後のミーティング

【まとめ】

東京にいたとき、岩手、宮城、福島が主な「被災地」だと考えていた。しかしながら、会津では一見普通の生活が行なわれている一方で、浜通り・原発周辺地域から避難者を受け入れていた。また、同じ津波の被害地域であっても、南相馬といわきでは被害状況は異なり、さらに南相馬やいわきのなかでも、集落や家ごとに被害は異なっていた。

このことからもわかるように、「被災地」といっても一様ではないし、「被災者」はなおさら一様ではない。それゆえ、震災発生直後の生存ニーズが満たされるにつれ、各避難者によってさまざまなニーズが出てくるのは想像に難くない。そこで、元気玉プロジェクトも、おにぎりセンターとしての役割から、避難所（者）アセスメントを軸にした長期支援の仕組みづくりへとその活動を移した。避難所から宿等への二次避難が進んでいるということもあり、現時点ではアセスメントの結果から課題を掘り出し、解決へとつなげるというところまではなかなか到達していない。しかしながら、時間の経過とともに避難者の状況やニーズは変わっていくこと、そしてこれから仮設住宅への入居が進むにつれ自死や孤

独死の発生が予想されることから、これから元気玉プロジェクトの真価が問われるところだろう。

今回の大震災で甚大な被害を受けている福島の農林水産業に対しては、販売・支援の動きが広がって来ている。素材広場がその動きに対応することができるのは、震災発生前から県内の生産者とつながっていたからであり、福島応援キャンペーンの広がりもまた、震災発生前につながりがあったからこそのものといえるだろう。その一方で、キャンペーンの依頼の多くが連休に集中し、品物が足りなくなることも予想される。農家は一時期に大量にとれるように生産しているわけではない。一過性のものではなく、持続的・継続的な支援が求められる。

【終わりに】

今回の研修を通じて強く感じたのは、日々の地域内外でのつながりの重要性だ。元気玉プロジェクトの活動も、会津の 4 団体につながりがなければ実現しなかっただろうし、被災地の視察や福島応援フェアなども現地の方々とのつながりがなければ難しかったと思う。さらにいえば、自分がこの時期に会津に来ることができたのは、震災発生前にインターンに申し込んでいたからだ。秋田に移ってからも、研修を通じて作ることのできたたくさんのつながりを大切にし、今後も会津、福島の復興に向けた取り組みに継続的に関わっていきたい。また、日頃から地域内外でつながりを作っていくことを心がけていきたい。

会津に来て、たくさんの魅力的な人びとと出会い、魅力的なモノや場所を垣間見ることができた。従来の研修内容では出会えない人びとと関わることができたことは、非常に喜ばしく、得難いものであった反面、地域をゆっくりと回ることができたとは言えず、まだまだ物足りなさは残る。これからも折を見て福島を訪れ、「観光復興」にも貢献していきたいと思う。

▲会津美里町高田エリアの街並み

▲「三浦木工所」見学

▲う～みさんとカオンのマスター